

# 学力向上を目指した学校組織マネジメントの研究 —求められる資質・能力を育成する学び合い学習を通して—

教育実践力高度化コース

(17AD002)

石山 勉

【指導教員】 安原 輝彦 磯田 三津子 庄司 康夫

【キーワード】 学力向上 校内研修 教員の意識調査

## 1 はじめに

21世紀の我が国は、少子高齢化、グローバル化、高度情報化、AI化の状況などに直面し、様々な分野で大きな変化が予想される。

こうした変化に対応し、持続可能な社会をつくる人材を育成するためには、①一人一人が考えや知識、知恵を持ち寄り、主体的に答えを作り出すこと、②調べたことを使って考え、情報や知識をまとめて新しい考えを生み出すこと、③多様性を生かして問題を解き、新しい考えを創造すること（国立教育政策研究所 2016）、が重要になってきていると考えられる。

## 2 研究目的

今後の未来を見据えると、子供たち一人一人が主体的に問題を考え、他者と協働し、問題解決に向けて新しい答えや価値を生み出すことが求められている。そこで本研究は授業においてそれぞれ知識・理解をはじめ見方・考え方が異なる子供たちを互いに学び合わせることで思考力・判断力・表現力を高めていくことを目的とした。特に、算数の授業実践を中心に、学び合い学習について校内研修を軸とした組織的なマネジメントに配慮し、授業実践の改善を目指すものである。

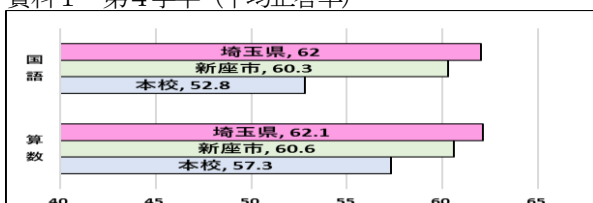
## 3 本校の実態

本研究における検証の観点から、児童の実態については資料1～9において、教員の意識調査については資料10～13においてそれぞれ述べる。

### (1) 児童の実態について

- ① 第4学年～第6学年 国語及び算数 平均正答率  
(平成30年度 埼玉県学力・学習状況調査より)

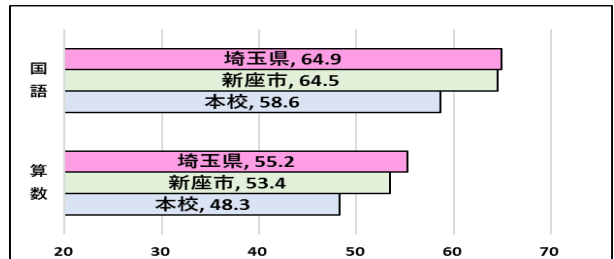
資料1 第4学年 (平均正答率)



資料2 第5学年 (平均正答率)

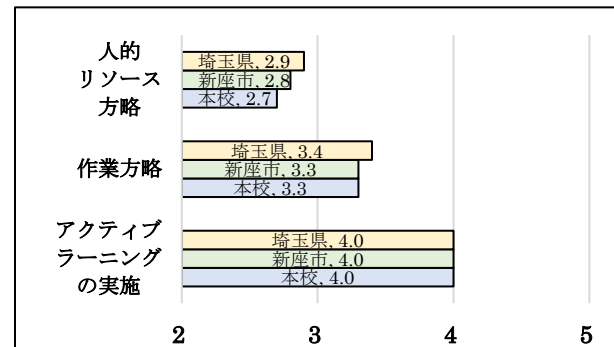


資料3 第6学年 (平均正答率)

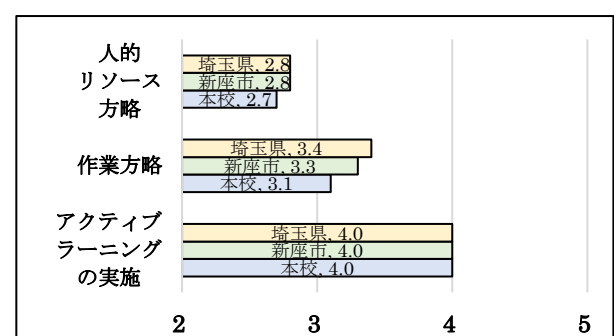


- ② 学習方略・非認知能力に関する項目－1  
(平成30年度 埼玉県学力・学習状況調査より)

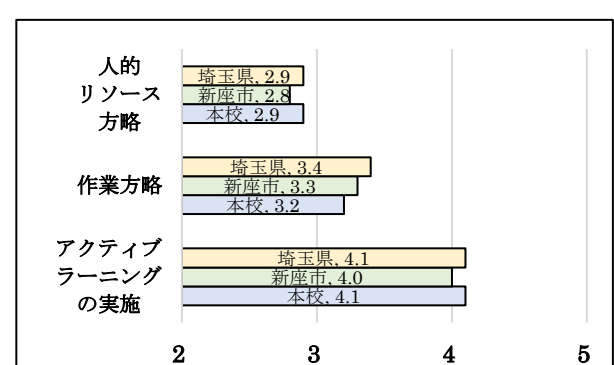
資料4 第4学年



資料5 第5学年



資料6 第6学年

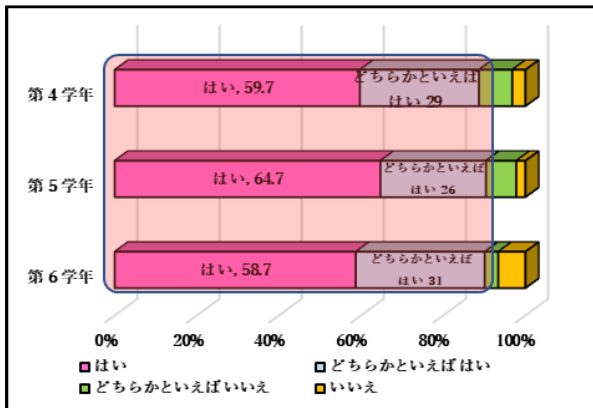


資料1～3より、本校各学年の児童は両教科において、県及び市の平均を下回っている。その一方、資料4～6より、学習方略・非認知能力に関する項目では、県及び市との比較においてその傾向に差はない。

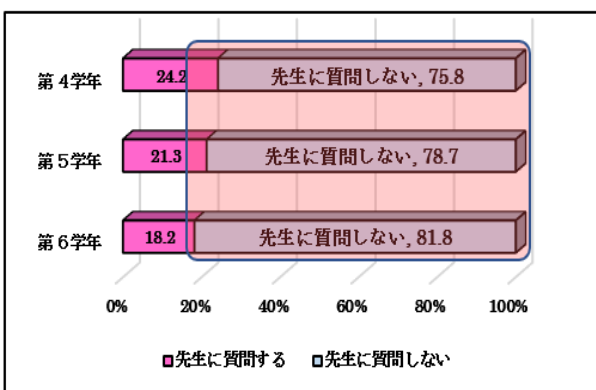
### ③ 学習方略・非認知能力に関する項目-2

(今年度の校内研修における児童アンケートより)

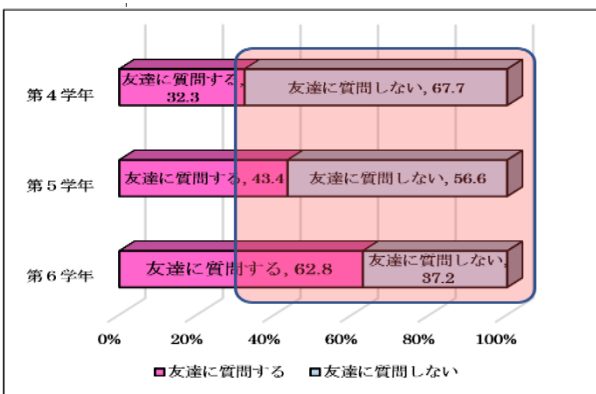
資料7 「算数の授業内容はわかりますか」



資料8 「算数の授業で学習がわからないとき-1」



資料9 「算数の授業で学習がわからないとき-2」



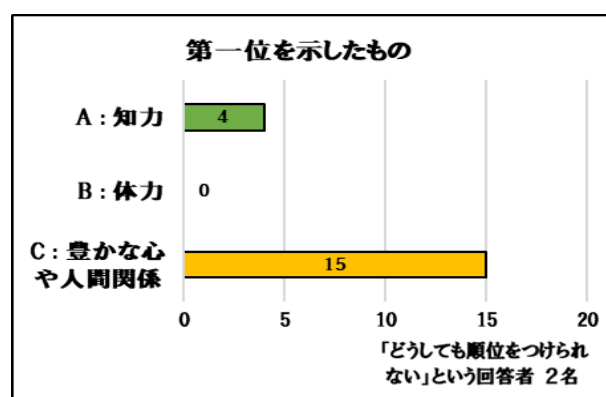
資料1～3及び資料7～9より、本校児童は算数の学力に課題がある一方、算数の授業は多くの児童が「わかる・どちらかというところ」と回答している。その要因として、後から考えて不十分だというわかり方(わかったつもり)の状態に留まっていることが考えられる(西林 2005)。そして授業中わからないときにその場で質問したりヒントを得ようとしたりする様子が見られない傾向がある。

以上のことから、本校児童は「わかったつもり」の状態に留まり、わからないことを自主的に解決しようとする傾向がある、と考えられる。

### (2) 教員の意識調査

① 本校教員が捉える指導観(本研究にかかる教員インタビュー調査【2018.9～10 調査人数21名】より)

資料10 「身に付けさせたい力に優先順位を付けるとしたら」

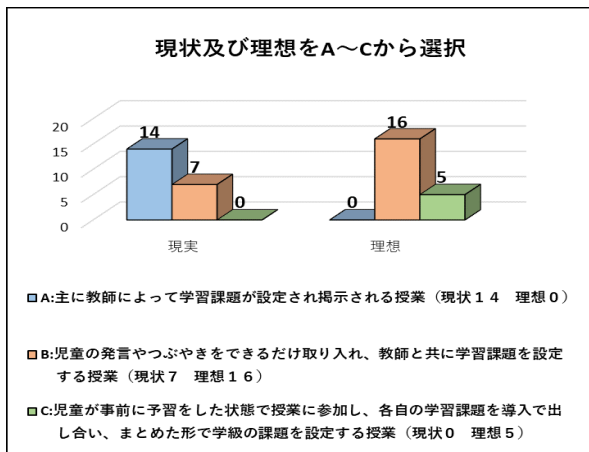


資料10より、本校教員の多くが日々の教育実践において「知力」や「体力」以上に「豊かな心や人間関係」を重視している傾向がある。その主な理由として、以下を挙げている。

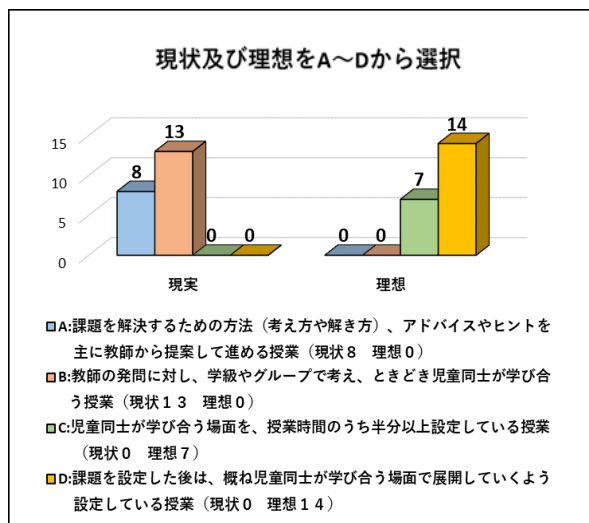
- [主に学校の重要な役割であるという認識]
- ・人間関係が激変する中Cの育成は重要 Cのみ学校における集団生活をとおして育てることができるから
- ・学校という社会で養うべき重要な項目だから
- ・学校は社会で生きていく力を育む場であり実際にそれができる場であるから
- [主に教員の指導理念・願い]
- ・何より人を大切にしたい人になってほしいから
- ・一人では生きていけない 人間関係構築力が重要だと考えるから
- ・大人になって自立するためにはCが一番必要だと考えるから
- ・人の気持ちが分かる人が他と共生できると思うから
- ・対人関係の作り方は社会生活の基本だと思うから
- [主に知力・体力向上の基盤になるという認識]
- ・CがあればABが高まる
- ・まずCを育てる そのつながりの中でABは高まると考えるから
- ・まずは心 心技体だから
- ・心を育てないと確かな学力はつかないと思うから
- ・ABを高めるためにはCが必要不可欠だから
- [その他]
- ・「生きる力」=「豊かな心」だと思ったからという回答が得られた。本校教員は、それぞれ独自の指導観を抱き日々の教育実践を行っている傾向がある。

② 本校教員が抱える授業実践上の現状と課題(本研究にかかる教員アンケート【2018.8 調査人数21名】より)

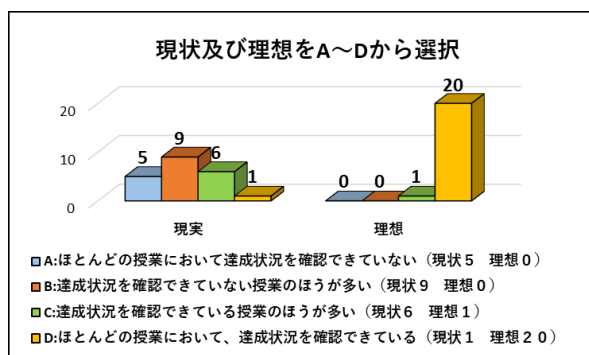
資料1 1 「導入におけるあなたの授業実践について」



資料1 2 「展開におけるあなたの授業実践について」



資料1 3 「児童一人一人の達成状況確認について」



資料1 1～1 3より、本校教員は児童の主体性を大切にし、いわゆる教師主導型ではなく児童同士が対話的に学び合い、その成果として児童の達成状況を毎日確認できる授業を目指している一方、現実はまだなかなかそれが実現できずにいる傾向がある。その主な理由として、以下を挙げている。

〔主に授業実践と評価の不一致という認識〕

- ・授業で身に付けた力が業者テストの点数向上に結びつかないことが多いから (他1名)
- ・ドリルや業者テストが未だに知識の定着や問題量をこなすことを児童に求めているから

〔主に学び合う学習の方法論・認識不足という認識〕

- ・伝えたり教えたりする内容に対して時間が足りないから (他9名)
- ・「学び合う」「教え込む」「個人でがんばる」を分けて考えているから
- ・教え込まないといけないうものもあるから
- ・具体的なモデルがないから (他1名)
- ・目の前で上手くいっているものを見れば少しは変わるかもしれない
- ・学び合わせたいと思っても、そこまでたどり着かないこともあるから
- ・準備や積み重ねが必要だから (他2名)

〔主に他の業務が多忙であるという認識〕

- ・学び合う授業の構成について検討したり考えたりする時間がとれないから (他3名)

〔主に「考え」＝「課題を解決し得る意見」という認識〕

- ・自分の考えをはっきり持って伝える子を育てるためには全職員の共通理解が必要だから

〔その他〕

- ・習熟の学習に偏っているから
- という回答が得られた。本校教員は、授業実践と評価が不一致であることを感じ、学び合う学習についてその授業構成等を議論する時間と場の必要性を一定量感じている。一方で、「4 5分間では学習が完結しない」「議論する時間の確保が難しい」と感じている傾向がある。

以上のことから、本校教員は

- ・豊かな心や人間関係が身に付いた先に「主体的・対話的で深い学び」が成り立つと捉えている
  - ・学力を向上させる手段として、学び合い学習が本当に効果的であるか確信が持たず、現状と理想が乖離している
- といった現状にあると考えられる。

#### 4 先行実践研究から

##### (1) 樋口(2016)による実践

樋口は、子供の学びの深まりを「課題の質」、課題探求における「子供相互の支え合い」、その際の教員における「対応」の3つでとらえ、中学年の算数におけるグループを軸とした学び合い学習を実践した。共有の課題を終えて発展課題に取り組む樋口学級のグループ学習では、できた子供ができていない子供を教える教え合いではなく、すべての子供がわからなさを出し、すべての子供が互いの考えを聴き合い、ともに探求する学び合いを目指した。子供たちが自分たちのグループのだれのどんな考えをも知ろうとし、大切にすることで、学びの深まりを検証した。

本校課題研究においても、「みんながわかる・できる授業の創造」に向けて、適切な課題を設定することは重要であると方向づけている。学び合い学習を通じて「みんながわかる・できる」ようになるため、課題の質を意識し、適切な課題を設定できるよう、校内研修において

議論の場を設定していく。

## (2) 山村（2015）による実践

山村は、「子供たちが考えてみたくなるような課題の提示」、「学び合う仲間」、「子供の探究に寄り添える教員」を意識し、低学年の算数におけるペア学習を軸とした学び合い学習を実践した。難しい課題であってもやりがいのある問題であれば、子供たちは意欲的に取り組むこと、ペアで取り組むことで安心感が得られ、意欲が持続することを検証した。

学び合い学習の実践において、教師行動は極めて重要である。「teach」から「facilitate」する指導への転換を本年度より本校学力向上プランに明記するなど、教師行動認識の共有化を図る。

## (3) 大野台中央小学校（2016）による実践

大野台中央小学校では、既習の知識・技能を活用したり、思考ツールを用いながら試行錯誤したりして問題を解決しようとする思考力の育成を目指し、学び合う算数科の授業実践を行った。学力二極化の対応として「イーブンな課題提示」をすることで、教え合いではなく学び合いを促すことをねらいとした。また、既習学習の理解差をそろえる取組や、思考力を見取る方法、学習のユニット化（授業の進め方に一定の型を設定すること）を検証した。一方で、授業以外においても学び合う風土作りや研究協議会後のリフレクション導入等、校内研修において推進していくことで全校の取組として検証した。

本校においても、日々の授業において学び合い学習を実践する風土作り、及び教員同士が気軽にリフレクションを実施できる場作りを目指す。

## (4) 犬山市教育委員会（2016）による実践

犬山市は、子供を主体とした学び合いの授業づくりを推進した。教員が真摯に子供と向き合い、謙虚に学び合い、高め合う同僚性の構築により、校内研修や全市的な研修の充実を図り、全ての教職員の力量と能力の向上を目指した。

本校でも校内研修においては授業力向上を推進する一方、教員の資質向上も重視し計画を立てている。児童が今後の未来を生き抜くために育むべき資質・能力について議論を深める等、教員同士の議論を促すマネジメントを検討していく。

## 5 研究仮説

本校児童の実態にあるように、「わからない」「わかったつもり」の状態のまま留まっている子供たちが少なくない。知識・理解をはじめ見方・考え方の異なる子供たちが「主体的・対話的で深い学び」に向かうには、協働的学習活動を実践することが有効であると考えられる。

本来「主体的・対話的で深い学び」により、豊かな心や人間関係も身に付くものであるが、本校教員は、豊かな心や人間関係が身に付いた先に「主体的・対話的で深い学び」が成り立つと捉えている傾向があると言える。

そこで、①教員研修において授業実践の基本となる求められる資質・能力、授業観などについての共有化を図り、②学び合い学習の授業について、校内研修を軸とした組織的マネジメントを重ね、教師自らが主体的に授業実践に取り組めば、子供たちが「主体的・対話的で深い学び」に向かい、かつ豊かな心や人間関係を一層育み、学力が向上すると考えられる。

## 6 研究方法

### ○本校課題研究に係る、本研究の明確な位置づけ

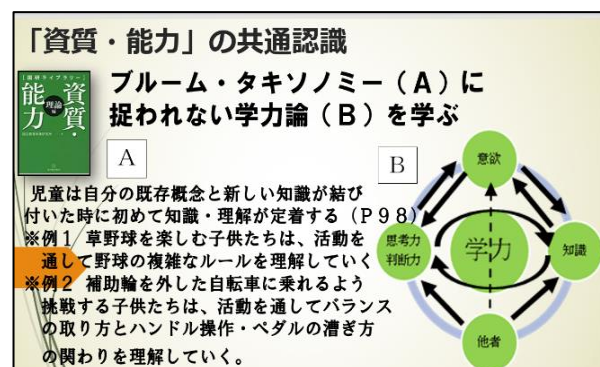
本校では平成29年度より3ヵ年計画で「みんながわかる・できる授業の創造」を研究テーマに掲げ、算数科の指導をととした授業改善に取り組んでいる。その背景として、「問題がわからないとすぐあきらめてしまう児童が多いので、今までの経験や学習内容を生かして粘り強く取り組む姿勢を育みたい」「(教員自身が) 授業展開を改めて見直したい」といった、児童の実態及び教員の思いがあった。そして、1年目を終え、課題を「伝達ではなく、構成的な授業の組み立て」「多くの児童に自分の言葉で表現させ、理解を深めさせる授業」と捉えた。

本研究は、本校課題研究テーマである「みんながわかる・できる授業の創造」を目指し、多様な子供同士が主体的かつ協働的に学び合うことで、わかった・できたという思いを育てることを目的としたものである。具体的には、算数科を中心として学び合う場面の授業展開、子供たち自らが学ぶ学習課題の組み立て、児童の言葉で表現し合う指導など、児童の主体的・対話的な授業展開を構想することで一層深い学びへとつながっていくことを実感できる授業を目指した。

### (1) 校内研修のマネジメントによる研究の共有化

#### ① 「本校の子供たちに身に付けさせたい資質・能力」及び「学力の捉え方」の共通理解

資料14「校内研修（教職員資質向上研修 H30.4）資料より抜粋」



上記資料を通して、学力を支える各要素は互いに関わり合い、多様な過程を経て伸びていくものとして共通理解を図った。

#### ② 学び合い学習の授業提示

第5学年の算数科を主として学び合い学習の授業を実践し、常時参観可として教職員への啓発を図った。

③ 授業実践後におけるリフレクションの充実化

職員室内や廊下移動中等、何気ない場面における数分単位での振り返りを大切にすることで、自身の反省として捉えるとともに、授業改善について積極的に議論する教職員集団の形成を促した。

(2) 授業実践の詳細

① 本校児童の実態に応じた学び合い学習プリントを作成した。

資料15「第5学年 算数 学習プリント」

面積の求め方を考えよう  
下の平行四辺形EFGHの面積を計算求めよう。

前回の学習で学んだことを生かして、平行四辺形の面積を求める公式を全員が理解できるようにしよう。  
平行四辺形の面積を求める公式を導出するために必要な知識  
(1)「底辺」について  
(2)「高さ」について

「全員が」・・・  
みんながわかる・できる  
を共有する課題

① 式 答え  
② 式 答え

④ 問題の課題をまとめ 振り返り  
ノート記述の共有化

② 学び合う学習のルール、児童の動きを授業中黒板に例示し、児童の学び合い学習の確立を図った。また、教職員へ資料として配布し、議論の対象とした。

資料16・17・18「児童への提示資料」

**学習のルール**

- 一生けんめい 学ぶ
- だれ一人 見捨てない。
- 友達の考え方も学ぶ

全員が「わかる」「できる」ためにあなたがすること

- 自分が「わかること」を仲間に伝える
- 自分が「わからないこと」を仲間に伝える
- 自分が本当にわかっているのか確認する  
⇒友達に説明してみる
- 仲良しとか関係なく、学び合う

**課題解決の流れ**

- ①自分の顧に相談する (今まで習ったことが生かせるか)
- ②教科書やノート、ヒントコーナーなど、物と相談する (今まで習ったことが生かせるか)
- ③友達に相談する
- ④自分が本当に分かったかどうか確認する

課題解決!

③ 学び合う姿勢を促す体制づくりとして、日常的に仲間同士で疑問を投げ掛け合うことができる学習環境を設定し、「分からないことを聞く」習慣が身に付くよ

う指導した(主に第5学年)。

資料19



「ひらめきスティック」

課題解決にせまる考え、学びを広げ深める考えを教員(児童も可)が選定し、机上に設置する。児童は任意のタイミングで立ち歩き確認する。

資料20



「みんながわかる・できる」を目指して伝え合い、学び合う。

資料21



徐々に「ひらめきスティック」の有無にかかわらず学び合うようになり、全員の課題解決を目指している。

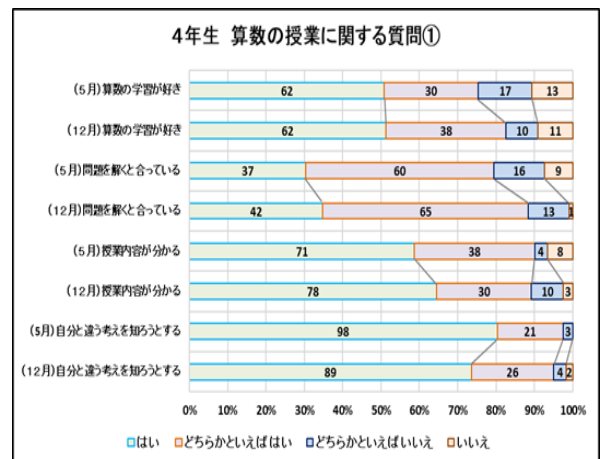
資料22・23・24 (葉のおよその面積を求めよう)

Bさんの考えを得て、過不足を調整し実際の面積に一層近づく平行四辺形に見立てたAさん。

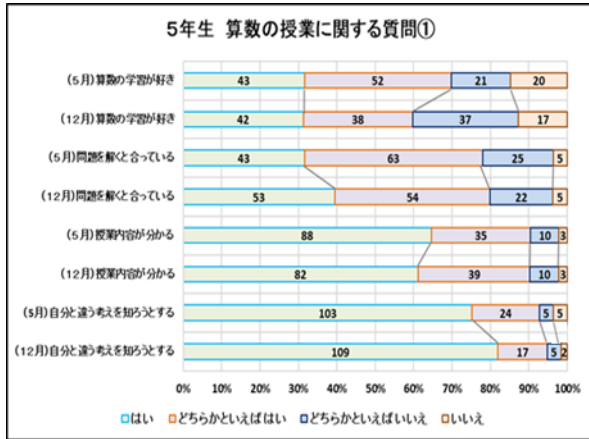
(3) 調査

学習方略及び非認知能力に関わる児童を対象とした本校独自の調査を5月及び12月に実施し、指導効果を検証した。

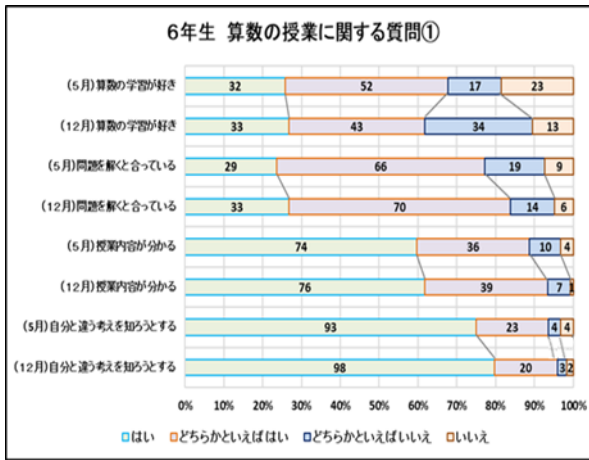
資料25「算数の授業に関する質問① 第4学年」



資料2 6 「算数の授業に関する質問① 第5学年」

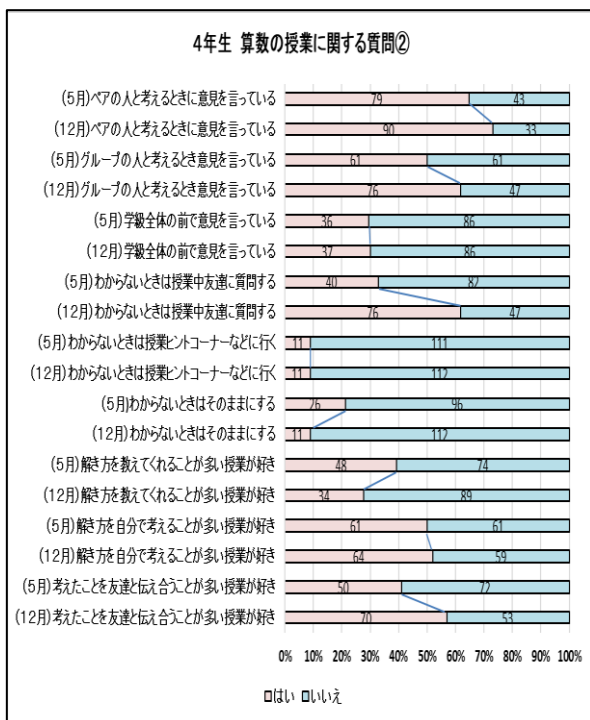


資料2 7 「算数の授業に関する質問① 第6学年」

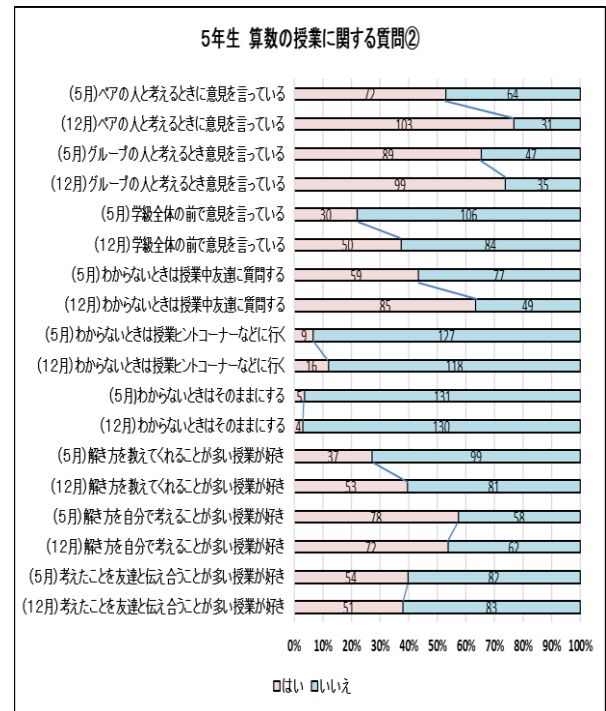


資料2 5～2 7より、第4学年「算数の学習が好き」第5学年・第6学年「自分と違う考えを知ろうとする」の項目においてはやや伸びが見られたが、有意な差があるとは言えない変化である。

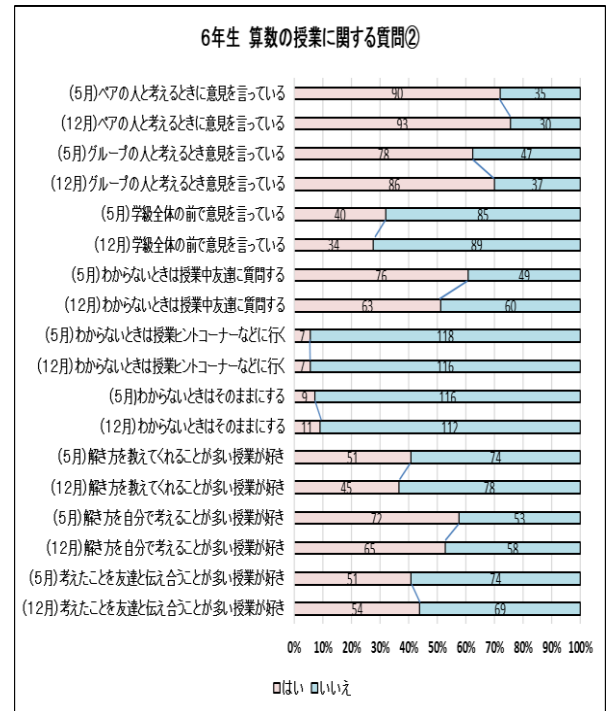
資料2 8 「算数の授業に関する質問② 第4学年」



資料2 9 「算数の授業に関する質問② 第5学年」



資料3 0 「算数の授業に関する質問② 第6学年」



資料2 8～3 0より、第4～6学年「ペアやグループの人と考えるとき意見を言っている」第4学年・第5学年「わからないときは授業中友達に質問する」の項目において、大きな伸びが見られた。全員がわかる・できる授業を目指して子供たちの学び合いを促した結果であると言える。一方、「解き方を自分で考えることが多い授業が好き」「考えたことを友達と伝え合うことが多い授業が好き」の伸びは多く見られなかった。児童が主体的ではなく、受動的・形式的に伝え合っていたことが懸念される。

(4) その他

①「全国学力・学習状況調査」及び「埼玉県学力・学習調査」を児童の実態把握に活用した。特に、「埼玉県学力・学習状況調査」においては、特別な配慮を要する児童の学習方略及び非認知能力を分析し、効果的な指導法（特に人的リソースの活用）を学び合い学習の授業実践に生かして授業実践を行った。

資料3 1 「学習方略データ結果からの学力向上アプローチ」

第5学年 結果	H30レベル		アクティブラーニングの 実施	学習方略						
	国語	算数		柔軟的方 略	プランニ ング方略	作業方 略	人的リ ソース方 略	認知的方 略	努力調整 方略	
本校平均	5-B	5-C	4.0	3.5	3.5	3.3	2.7	3.9	3.9	
A	2-C	2-B	2.6	1.8	2.5	2.3	2.5	1.5	3.3	
B	4-C	1-C	4.6	4.0	1.8	2.8	3.0	3.5	2.0	
C	4-A	4-C	3.4	2.3	3.0	2.3	2.8	3.3	2.5	
D	1-C	1-C	3.4	3.5	4.5	2.3	2.7	3.3	2.5	
E	1-B	1-B	4.3	3.0	3.7	3.0	1.0	4.0	2.8	

○「Aさん」…「アクティブラーニング」「柔軟的方略」等の支援を行えば…  
○「Eさん」…「人的リソース方略」が低いので、学び合い学習を効果的に進めれば…

②「教務通信」の発行による教職員の資質向上及び学び合い学習の啓発を行った。

平成30年11月7日 第8号  
石山 勉

## 教務通信

あなたの学級にもいませんか？「わかったつもり」で留まる児童  
※昨年度の夏季休業中にご紹介した内容を  
「わかったつもり 読解力がつかない本当の原因（西林克彦）」では、「後から考えて不十分だ」というわかり方を、「わかったつもり」と表現しています。

①Aさんがアイロンをかけたので、シャツはきれいになった。  
上の文を読んで、何か「わからないこと」はありますか？児童に問うと、その多くが「特ありません」と回答するのではないかと思います。シャツのシワを伸ばす道具である「アイロン」を使ったので、「シャツ」が「きれい」になった。確かに、特別「わからないこと」はないのかもしれない。

②Aさんがアイロンをかけたので、シャツはグチャグチャになった。  
こちらの文はいかがでしょうか。児童に問うと、「あれ？どうして？」と回答するのではないかと思います。なぜ「アイロン」を使ったのに「シャツ」が「グチャグチャ」になったのか。「なぜだと思いますか」と児童に問うと、「アイロンが壊れていたかも」「シャツのシワが強かったから」「Aさんがアイロンの使い方を知らなかった（間違っていた）から」「Aさんが小さい子供だったから」等、あれこれ回答します。

①を読んだときに、「アイロンの調子」「シャツのシワの具合」「Aさんとどんな人物なのか」といった疑問が浮かんでしまうか。「わかった」と感じて、「まだわからないことがあるかも」と感じ、友達や先生の意見を熱心に聞ける（学びを広げ、深めることのできる）児童を育てたいですね。

働き方改革：通知表の所見、担任外の先生からも広く入力していただきましょう！  
校務システムの「気付き入力」機能を活用していただくことで、担任以外の先生（隣の担任、他学年担任、専科等）がその都度所見の材料を担任へ提供することができます。より多面的な所見内容となるよう、特に専科の先生方は積極的な活用・入力をお願いいたします。入力の詳細方法は教務までお問い合わせください。専科担任の先生方へは近々伝えます。

11月22日（木）15：30～ 校内研修 読解力（問答室）について  
教職員資質向上研修の一環として、埼玉大学 安原 理彦 教授をお招きし、ご講演いただきます。学力の捉え方、主体的・対話的で深い学びの実践、教職員のチーム行動などについて貴重なご意見をいただけると思います。

教務主任としての立場から、教職員の資質向上の一助となり得る文献の紹介、学力論、学び合い学習についての情報提供を行った。

7 研究の成果

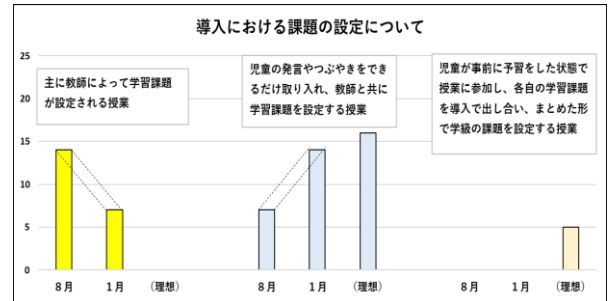
(1) 授業時間内における、他者と関わる時間の確保

12月の児童アンケート（資料28～30）より、友達と考えを伝え合ったり、わからないこと（わかっていないこと）を確認し合ったりする授業へ変化したと言える。

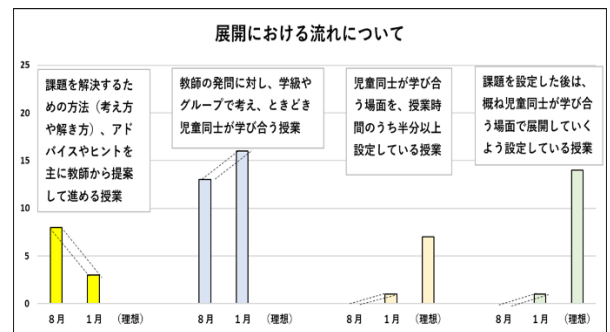
(2) 教職員の意識改革

教員向けアンケート（資料10～13）の実施がきっかけとなり、教員それぞれが実践している授業の現状と理想の乖離を意識するようになり、資料32～34で示すように「teach」から「facilitate」へ向かうようになった。

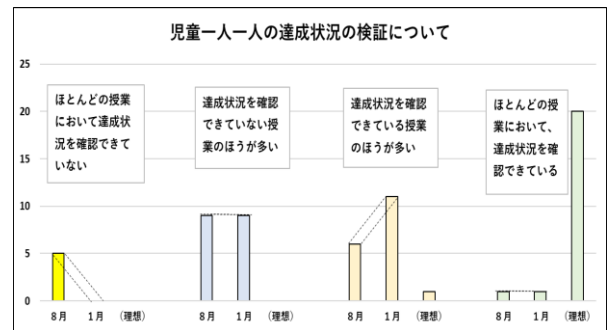
資料3 2 「あなたの授業実践について②-1」



資料3 3 「あなたの授業実践について②-2」



資料3 4 「あなたの授業実践について②-3」



資料3 2より、児童の発言やつぶやきを取り入れた課題設定を行う教員が増加していると言える。また、資料3 3より、展開においても児童同士が考え方や解き方を伝え合ったり、アドバイスをしたりする時間が増加していると言える。授業時の教師行動が「facilitate」へと変容しつつあり、児童の主体的で対話的な姿が一層多く見られるようになった。

また、資料3 4より、達成状況の確認機会の増加が見られた。以前より増加したと回答した複数の教員に理由を質問したところ、「達成状況の確認という目的でペアやグループの活動が有効であった」「学び合っている時間が、そのまま達成状況の確認につながった（理解と達成状況確認が統合された）」という回答が得られた。「45分間で授業が完結しないのでは」等、学習時間の超過を懸念する教員も複数いたが、主体的で対話的な児童の

姿が見られ、達成状況の確認も可能となり、時間内に完結すると実感できれば、学び合い学習は今後一層広がっていくと感じる。

研究実践を通して、学び合い学習は、本校児童の学力（当面は主に知力）向上という目的を達成するための手段であるということ共有したことにより、他の様々な取組もその多くは手段であること、その目的は学力（知力・徳力・体力）向上であるという議論が教職員間で行われるようになったと捉えている。

## 8 今後の課題

学力向上を促す（目的とする）手段としての学び合い学習を、今後学校組織として一層充実させるために取り組むべき課題として、以下が考えられる。

### (1) 年度当初における校内研修の工夫

毎年複数の教職員が入れ替わるため、年度当初の校内研修において、学力向上を目指した本校の実践及びその必要性を共有できるよう、教員の個人担当を事前に設定し、主体的な校内研修の運営を図る。

### (2) 主体的な学び合い学習を促す指導及び教材の工夫

45分間の授業内において、他者と関わる機会が増えたことは上記のとおり一定の成果ではあるものの、児童がその良さや楽しさ、必要性を一層体得できるようにすることが重要である。受動的・形式的な話し合いや伝え合い活動とならぬよう、教員の指導（facilitate）及び効果的な教材について研修を積んでいく。

### (3) 本校課題研究等、他の取組との統合

学び合い学習は教科等を問わず「主体的・対話的で深い学び」を促し得る学びの形態であるといえる。課題研究や他の学力向上を目指した取組と分けて考えるのではなく、統合して実践を重ねる。

### (4) 教職員同士の学び合い時間の確保

教育活動の目的である「学力向上」をキーワードに業務統合を推進し、日常的に学び合い学習等授業改善に関わる議論を教職員間で活発に行うことのできる環境を整える。

## 参考文献

- 1) Dominique. Simone. Rychen・Laura. Hersh Salganik. (2006)『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』 明石書店
- 2) 『The Definition and Selection of KEY COMPETENCIES』(2012) OECD
- 3) 国研ライブラリー 資質・能力〔理論編〕(2016) 国立教育政策研究所 東洋館出版社  
※本研究における検証の都合上、認知能力として知識・理解のみに言及しているが、本研究における学力構造観（「ブルーム・タキソノミー」(Bloom, 1956)）に捉われない、より質の高い知識の獲得を目指した相互作用的なものの性質を踏まえると、結果として思考力や判断力、表現力等も相対的に高まることが期待される。
- 4) Peter M. Senge・Nelda Cambron-McCabe・Timothy Lucus

- Bryan Smith・Janis Dutton・Art Kleiner (2014)『Schools That Learn A Fifth Discipline Fieldbook for Educations, Parents, and Everyone Who Cares About Education』 英治出版
- 5) 河合雅司 (2017)『未来の年表 人口減少日でこれから起きること』 講談社現代新書
- 6) 西林克彦 (2005)『わかったつもり 読解力がつかない本当の原因』 光文社新書
- 7) 中室牧子 (2015)『「学力」の経済学』 Discover
- 8) 佐藤学 (2015)『学び合う教室・育ち合う学校 ～学びの共同体の改革～』 小学館
- 9) 杉江修治 (2011)『協同学習入門 基本の理解と51の工夫』 ナカニシヤ出版
- 10) 西川純 (2017)『今すぐできる！全校『学び合い』で実現するカリキュラム・マネジメント』 明治図書出版
- 11) 水落芳明・阿部隆幸 (2014)『成功する『学び合い』はここが違う！』 学事出版
- 12) 河野英太郎 (2013)『99%の人がしていない たった1%のリーダーのコツ』 Discover
- 13) 秋田貴代美 (2018)『「協働の学び」が変えた学校 新座高校学校改革の10年』 大月書店
- 14) 新井紀子 (2018)『AI vs 教科書が読めない子どもたち』 東洋経済新報社
- 15) 中村高康 (2018)『暴走する能力主義 教育と現代社会の病理』 ちくま新書
- 16) Robert Kegan・Lisa Laskow Lahey (2013)『なぜ人と組織は変わらないのか』 英治出版
- 17) Lucy Crehan (2017)『日本の15歳はなぜ学力が高いのか？』 早川書房
- 18) 妹尾昌俊 (2015)『変わる学校、変わらない学校 学校マネジメントの成功と失敗の分かれ道』 学事出版
- 19) Jared Mason Diamond・Yuval Noah Harari・Lynda Gratton・Nick Bostrom・Daniel Cohen etc… (2018)『未来を読む AIと格差は世界を滅ぼすか』 PHP新書
- 20) Yuval Noah Harari (2018)『ホモ・デウス テクノロジーとサピエンスの未来』 河出書房新社
- 21) 工藤勇一 (2018)『学校の「当たり前」をやめた。生徒も教員も変わる！公立名門中学校長の改革』 時事通信社
- 22) 樋口千紗 (2016)「学ぶ魅力を引き出すジャンプの学びへの挑戦 (小学校第3学年算数『三角形と角』授業実践)」 学びの共同体研究会
- 23) 山村ゆかり (2015)「ジャンプの課題への挑戦 (小学校第2学年算数『九九をつくろう』授業実践 三重学びのネットワーク
- 23) 相模原市立大野台中央小学校 (2016)「自分の考えをもち、自ら表現する子の育成 (学び合う算数科の授業実践)」
- 24) 犬山市教育委員会 (2016) 犬山の教育 「これまでの振り返りと今後」